
月光陛下と太陽妃

月藤 琳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月光陛下と太陽妃

【Nコード】

N9745T

【作者名】

月藤 琳

【あらすじ】

幼い頃湿原で出会った少年は自分を月だと称し、あたしを太陽のようだと称した。

その後に出会うことはなかったけれどどうしてかその人のことが忘れられずにいた。

時を経て突然現れた帝都からの使い。

思い出の人を探しているという皇帝陛下の皇妃候補。

ちよっとした哀れみからお試しで引き受けてしまったあたしに待っているのは一体どんな未来なのか。

幼い頃の出会いが奇跡を呼ぶ。
のちに月光陛下と太陽妃と呼ばれることになるふたりのお話。

プロローグ

とある場所にアルガントと呼ばれる大きな帝国がありました。

その国の王は女性と見間違えるほどとても美しいと言うことで評判でした。

しかし国王はその容姿を隠すように仮面をし全てを遮っていました。

顔を見ただけで人々は見惚れてなにも手につかなくなってしまっからでした。

国にはたくさんの美しい娘たちが居ましたが誰ひとりとして王の前で平静を保てるものは居ませんでした。

頭を抱える宰相や家臣たちは考えました。

用は慣れればいいのだと考え国中を探し回ったのです。

「と言うわけなのですが・・・」

「断る。可愛い妹を嫁になどやらん」

長ったらしい説明のあとに一刀両断した。

今まで自分たちが守り育ててきた妹をそんな面倒ごとの起きそうな場所へとやってたまるか。

例え皇帝の嫁であったとしてもそれだけはいやだった。

「しかしこれは国中の問題です！」

「そんなの周りにごろごろ転がっているだろう。それはつまりあれか？　うちの妹が男勝りだとも言いたいのか」

「滅相もない！！　妹殿は乗馬をされたりなどするととても活発な方だと聞いております。」

先程から嫁に來い、嫁には出さないの堂々巡りだった。

「とにかく妹を嫁にはやらない。帰ってくれ」

父親は出張でいないし母親はその父親について行って帰ってこない。
い。

実質、家を取り仕切っているのは長男である自分だった。
追い返して数分ほどして妹が帰ってきた。

「ただいま」

「お帰り、ラヴィ」

「今日もあの湿原に行って来たのか？　お前はあの場所が好きだな」

四人兄妹の末っ子であるラヴィを俺たちはとても可愛がっていた。

「お客様でも来てたの？」

「特に気にする必要はないから」

何度きても追い返してやる。

「あ、そういえば今日湿原でとても綺麗な人を見かけたわ」

「あの辺りは一応観光名所だから観光にでも来たんだろう」

「そうかな。あの人ひとりだった気がするけど」

ラヴィが首を傾げながら疑問符を浮かべていた。
愛らしい妹を絶対に嫁などにやるものかと改めて心に誓った俺たちだった。

翌日、朝食を食べ終えて少しばかりの休憩を取っていた。
客だと言う報せにため息をつきながら応接間へと向かう。

「またあんなたちが……」

昨日と違うのはフードを目深に被った怪しい人物が壁に寄り掛かっていること。

「ご本人様に会わせていただけませんか」

「妹は嫁にやらないと何度も言っただけです」

一国の宰相が自らやってきたのだからそれほど重要なのは分かる。
本人には報せていないがきっと優しいラヴィのことだから了承してしまう。

「目に見えてあの子が苦勞するのが分かるような場所、皇帝の嫁にはやりたくない」

「それに関しましては来ていただけたら最善を尽くします」

そう、忘れていたのだ。

客が帰るまで部屋から出るなというのを伝えることを。

プロローグ（後書き）

突発的にはじまりました。なんとか完結できるように頑張りたいと思います！

思い出の中のあなた

「お兄ちゃん、どうしてそんな落ち込んだ顔しているの?」

家族と遊びに来た湿原でひとりの少年とであった。
きらきらと光る綺麗な銀髪と澄んだ灰色の瞳を持っているのにそれを隠すように俯いていた。

「……キミは?この近くの子?」

「うん。家族で遊びに来ているの」

「家族、か」

どこか淋しそうに少年は呟いた。

「? お兄ちゃん、家族は居るの?」

「居るけど……仲はあまり良くない」

瞳が揺らいだのが見えて頭を撫でてあげた。

「あたしが泣きそうになるといつもお兄ちゃんたちがこうしてくれるの」

そう言うてにっこりと笑った。

眩しそうに目を細めたかと思うと少しだけ笑った。

「キミは太陽みたいだ。それに比べて僕は……」

「あたしがお日さま? ならおにいちゃんはお月様?」

「お月様、か。月はひとりじゃ光ることは出来ない。確かに僕にぴったりだ」

しゃがんで目線を合わせると瞳は揺らいでいなかった。
覗き込むようにしていたのが気に障ったのか視線はそらされてしまったけど。

「んーと、お日さまとお月様って追いかけてっこしてるんだよね？
もしお日さまだけならお日さまもきつとひとりで淋しいよ。お月様が居てくれるからお日さまも輝いてるんじゃないかな。あのね、あたしお月様好きだよ。お月様ってお兄ちゃんの髪みたいにきらきら光ってとっても綺麗だもん。」

遠くで自分を呼ぶ声がある。

「もう行かなくちゃ」

立ち上がるといつも自分がしてもらっているように少年の額にちゅっと口付けた。

「これ元気が出るおまじないなんだって。元気出してね、お兄ちゃん」

手をふってお別れを告げると戸惑い気味に手を振り替えてくれた。

それを確認してあたしは家族と合流した。
その少年と湿原で会うことはもうなかった。

久しぶりに昔の夢を見た。

もしかして昨日あの湿原で人を見かけたからかもしれない。

あの少年は今どうしているんだろう。

「なんだか騒がしい？」

朝からこんなに騒がしいのは珍しいと思いつつ廊下を歩いていた。応接間の方からだからお客様でも来ているのだろうか。兄たちがなにやら難しい表情で中の様子を見ている。

「お兄様たち、一体どうしたの？」

「ラヴィー!?」

「部屋から出るなって伝えさせるの忘れてた!!」

声をかけると物凄く驚いた顔で見られた。

部屋から出るなって一体どんなお客様が来ているの？

考えていたら応接間から転げそうな勢いで誰かが出てきた。

「お初にお目にかかります、ラヴィー・グラス様。私はアラルガント帝国で宰相を務めております、クロエと申します。どうか私の話を聞いていただけないでしょうか」

「え、は、はあ」

とりあえず応接間の方へと戻り説明とやらを聞くことになった。いちから説明を受けてやっと理解することができた。

「えっと、それでは陛下の前でも平静を保っていられる相手を探していてあたしに辿り着いたと」

「はい、そうなんです」

「皇帝陛下は普段から仮面をされてらっしゃるんですよね？ 仮面をつけていらしたら他の皆さまも大丈夫なんですよね？ でしたら別にそんな方を探されなくてもいいと思うのですが……」

一日中、眠るときまで仮面をつけているわけではないと思う。

それでも仮面を外されることなんて滅多に無いというのだからあたしじゃなくてもいいと思うんだけど。

「それはご尤もなご意見なのですが、自分よりも美しい人の傍には立てませんと言われてしましまして……」

「ですが貴方たちは慣れればいいとお考えなのであれば別にあたしじゃなくても構わないと思います。それにあたしが陛下の素顔を拝見して、平静を保っていられるかどうかなんて誰にも分かりませんよね？ 万人が万人、そうなるのでしたらあたしも同じだとお考えにはなりませんでしたか」

理解は出来たけど納得は出来なかった。

いきなりそんな理由で皇帝陛下の嫁になってほしいと言われたって困る。

陛下の前で平静を保って世継ぎを生む人が欲しいだけであたしじゃなくてもいいはずだから。

「ち、違っんです！ 名目上はそういう理由で訪れたのですが、別の意味もあるんです……」

何故この人はこんなにも必死になっているのだろう。

あと壁に寄り掛かるようにしているフードの人も物凄く気になる。

「今では皇帝陛下として人々の前に立ち手腕を発揮されてはおりませんが、幼い頃の陛下は引っ込み思案で今とは間逆な感じでした。それを变えてくださったという思い出の人も探しているんです。もし見つからないのであれば諦めて一生独身を貫き通すなんて言われるから！　お願いします、ラヴィ様。お試しでも何でも構いませんのでどうかどうか一度、帝都までお越しください」

なんだか若干哀れに思えてきた。

土下座しそうな勢いのクロ工様に兄たちの方をチラッと見ればため息をつかれた。

「ラヴィは優し過ぎるよ」

「それがいいところなんだがな・・・」

「いいよ。ラヴィが決めたのなら、行っておいで」

こくりと頷くとクロ工様に視線を戻した。

「お試しということで一度帝都までお伺いさせていただきます。もし無理だと判断された場合はすぐに戻ってきますから」

「本当ですか！？　ありがとうございます！」

飛んでいきそうな勢いのクロ工様とフードの人を見送るべく玄関まで出た。

「帝都に来る日程が決まり次第知らせてください」

「分かりました」

「それではラヴィ様、帝都でお待ちしております」

深々と頭を下げ去っていった。

これは大変なことになったものだ。と他人事で考えていた。

だって自分が陛下の思い出の人である可能性はゼロだと思っていたのだから。

思い出の中のあなた（後書き）

というわけで帝都に旅立つことになりました。どう考えても（ry
必死な宰相クロ工を物凄く哀れに思っただらしい。

いざ帝都へ向けて（前書き）

き、気付けばお気に入り登録数が100件越え・・・！？信じられない気持ちでいっぱいです。こんなに多くの方に読んで気に入っていただけたとは思ってもいませんでした。中途半端なお話の欠片がたくさんありすぎて危力が分散気味ですが頑張りたいと思います。

いざ帝都へ向けて

その報せが両親に伝えられたかと思うと飛んで帰ってきた。

「ラヴィ、本当に行くのか？」

「もしかしたら面倒ごとに巻き込まれて帰ってこられなくなるかもしれないのよ？」

「分かってる。でも凄く困ってるみたいだったから……」

そう、未だに他人事のように考えていた。

帝都に行くのは自分だと言っのに。

「大丈夫よ。きっとすぐに帰ってこられるから」

一応日程を知らせて帰ってきた返事には客人として迎えると書いてあった。

お試しのようなものだから荷物は最低限のものしか持っていけない。

出発は明後日の早朝。

ここから帝都までは約三日かかる。

「気をつけるんだぞ、ラヴィ。知らない人には絶対についていっちゃいけないぞ」

「そこまで子供じゃないから」

バタバタと準備をしている間にあっという間に帝都に旅立つ日が来てしまった。

「それじゃあ行ってきます」

「道中、気をつけるんだよ」

「アルバート、ラヴィをお願いね」

「ああ」

護衛と言った感じで一番上のアル兄様が帝都まで着いてきてくれる。

退屈しないようにと読書用の本を何冊か持った。

一冊目を半分まで読み終わる頃に日が暮れてきて一つ目の町に泊まることになった。

「皇帝陛下の思い出の人、か」

宿屋の一階で夕食をとっているとアル兄様が思い出したように零した。

「そういえばそんなこと言ってたけど・・・どうしてその人を探さないのかな」

「たぶん陛下自身も素性を知らないってことじゃないか？」

うちはそんな大層な位ではない。

それほどまでに切羽詰っていたと言うこと？

「よく分からないわ。」

「そうだな」

夕食を終えて割り当てられたひとり部屋へと戻ってきた。
帝都は一体どういう場所なのだろう。

皇帝陛下というのは一体どんなかたなのだろう。

不安はたくさんあるけれど頑張らなくちゃ。

「お月様……」

夜空に輝く大きな月を見つけてかの少年を思い出した。

「お月様はお日様の光を反射して輝く」

あれから天体に関して興味を持って勉強するようになった。

月は太陽光を反射して光る。

彼は自分が月だと言ったけれど、支えになってくれる太陽を見つけたのだろうか。

考えるのを辞めて早々に眠りについた。

明日も帝都にむけての長旅になる。

休めるときにゆっくりと休まなければ。

持ってきていた本を全て読み終わる頃には帝都へと到着していた。
少し見回ることにして兄と歩き回る。

こんなにも広く賑やかなさすがに都会と言った感じ。

「やっぱり全然違うね」

「ああ。住み慣れた場所の方がずっといいと思うけどな」

帝都へと無事に到着したことを両親に残った兄たちへ文を書いて送った。

これから少しの間お世話になることであろうお城を見上げてため

息をついたのだった。

皇帝陛下という人（前書き）

お気に入り登録件数200越え&評価ありがとうございます！<<も
っともっと移り気ながら頑張っていきたいと思います！！

皇帝陛下という人

連絡を受けてかクロエ様が出迎えてくれた。

「この度は急な申し出だったのにもかかわらず遠くから足を運びいただき感謝いたします、ラヴィ様」

「しばらくの間、お世話になります」

いつまでになるかは陛下が決めることだろう。
ここでアル兄様とはお別れ。

「ラヴィをよろしくお願いします」

「はい。確かにお願いいたしました」

優しく頭を撫でると名残惜しそうに手が離れた。

「ラヴィ、体調管理には気をつけるんだぞ。何かあったらいつでも手紙をよこしていいから」

「ありがとう、アル兄様」

クロエ様の後に続いて城内へと足を踏み入れた。

まず最初に今日から過ごすことになる部屋へと案内された。

「ラヴィ様は大事なお客様ですので万が一のことを考え侍女と警護がふたりずつ付きます。なにかありましたら侍女たちに言いつけてください」

部屋の中で待っていたのはあたしよりも少し上くらいの綺麗な女性がふたり。

家では何でも自分でしていたので慣れていないんだけど大丈夫かな。

「ラヴィ様のお世話を仰せつかりましたマーガレットと言います」
「同じくシルビアです。これからどうぞよろしくお願いします」

自己紹介のあとに深々と頭を下げられて戸惑ってしまった。

「ラヴィ・グラスと言います。しばらくの間お世話になります。どうぞよろしくお願いします」

自分の名を名乗ったあとに同じように頭を下げると微笑んだ。
とても戸惑ったような表情のクロエ様と口元を押さえて横を向いているマーガレットさんたちがいた。

「あ、あの・・・？」

「ラヴィ様、この部屋に滞在されているときはこの部屋の主は貴方です。ですから侍女たちに頭を下げる必要はありません」

「そういうわけにはいきません。これからお世話になるんですよ？
物事は最初が肝心なんです」

もしかして兄たちが過保護なので少し誤解されいたのかもしれない。
い。

礼儀作法に関しては幼い頃から厳しくしつけられてきた。

「そうですね、クロエ様。なにことも第一印象が肝心ですわー！」
シルビアさんが反論したのにクロエ様がため息をつかれた。

「長旅でお疲れになられているでしょう。陛下にお会いできるのは早くて今日の夕方ぐらいになりそうですのでそれまではごゆっくりお休みになってください」

「はい。分かりました」

果たして皇帝陛下とはどういう人なのか。

クロ工様が部屋を出て行かれてから問いかけてみた。

「陛下はどのような方なんですか？」

「とても凛々しいお方です。公務にはとても熱心ですし城内のものの話だけではなく民たちの声にもよく耳を傾けられているお優しい方です」

それでもその美貌ゆえに仮面をつけなければ仕事にならない。
なんだかそれがとても淋しく感じたのはあたしだけなのだろうか。
仮面をつけて周りとの距離を置いて……。

「陛下の思い出の人のお話は誰でも知っていることなんですか？」

「知らないものはいないと思います」

「幼い頃の陛下は人の前に立って政治を進められるかどうかも不安になるほどとても引つ込み思案で大人しい方だったそうです。その頃も女子と見間違われるほどの容姿をお持ちで、王位目当てで性別を偽られているのではないかと陛下とスザンヌ様がお疑われになったこともあるそうですから……それは事実無根でしたが。そんな陛下を変えてくださったのがその思い出の方なのだそうです」

あたしは何も知らなかった、陛下は凄く苦労されてきた人なのだと。

「本当に女性が傍に寄ることは出来ないんですか？」

「はい。仮面をされていても雰囲気だけで駄目な方、声を聞くだけで駄目な方もいらっしゃいます」

ならば誰が陛下の身の回りのお世話をしているのかな。

なんだかとても不安になってきた。

例え陛下にお会いしてあたしが大丈夫だったとしても陛下が探されているのは思い出の人。

「ですがラヴィ様でしたらきっと大丈夫だと思います」

「ラヴィ様も陛下に負けないぐらいの魅力をお持ちですもの」

そう言われても自分にはなにがなんだか分からない。

分からなくて首を傾げていたら優しい頬笑みを向けられた。

「陛下にお会いになる夕方まではお時間がありますからゆっくりお休みになってください。今紅茶の準備をしてまいります」

「すみません」

部屋に残されて一息つく。

やはり生家にいるよりもずっと緊張してしまう。

陛下との対面まであと少しなのだと思うほどに苦しくなる。

ちよつと可哀想に思えて了承したけれど、本当にあたしはここに来ても良かったのだろうか。

皇帝陛下という人（後書き）

侍女さんの視点からみるヒロインとか書けたら面白いかな〜と思っています。

一瞬にしてヒロインは侍女さんたちのハートを掴みました。ヒロインの持つ魅力とは一体なんなんでしょうね。

陛下との顔合わせ

夕方までゆつくりと休むことが出来た。

マーガレットさんたちが帝都のことを話してくれたりと勉強にもなった。

「さあ、ラヴィ様。陛下にお会いになられる前に着替えましょうか」
「その前に湯浴みですわね」

遠慮しようとしたら引きずられるようにしてお風呂場に連れて行かれた。

「こ、ここからはひとりで大丈夫です!!」

同じ女性でも自分よりも綺麗な人たちに見られるのは恥ずかしい。

「そうですか。ではお上がりになられましたらお知らせください」

とても残念そうな表情でふたりは脱衣所から出て行った。

手短に済ませようと浴室へと足を踏み入れた。

さすがにお城の浴槽と言った感じでとっても広い。

上がって着替えを終えるとふたりに声をかけた。

「もう完全に着替えられちゃってるじゃないですかあ」

また残念そうな表情で言われてしまった。
そこになにか問題でもあるんですか!?

「大体自分で出来ることは自分でしてきたので手を借りるということには慣れていないんです」

「いいえ、慣れていただかなければ困りますわ、ラヴィ様」

力説されるけれど侍女がつくなんてここに滞在している間だけなんです。

「でもまだ私たちには役割があるわ。そう。ラヴィ様をきせか・・・着飾ること！」

明らかに言い換えたなにかは聞かなかったことにした。
部屋に戻ったあと、ふたりに凄く楽しそうにお化粧されたり着せ替えられたりしてすでにぐったり。

「いい出来栄えですわ。大変満足です」

「これなら陛下でさえも目を奪われるはず！」

クロエ様が迎えに来られて後をついていく。
どこに向かっているのかは分からなかったけれどたぶんお城の奥？
てつきり謁見の間とかで会うのかと思っていた。

「こちらで少しお待ちください」

「あ、はい」

庭園、だろうか。

四季を彩る綺麗な花々がたくさん咲いているし手入れも行き届いている。

その花を見ながら少し歩いていると見慣れた花を見つけた。

「この花……湿原に咲いているのと同じ」

思い出の場所である湿原に同じような花が咲いている。
あの花はけっこう有名なもののかな。

「気に入ったか」

突然声をかけられて勢いよく振り返った。

「えっと……」

きらきらと輝く銀髪は誰かを思い出させる。

仮面をしていることに気付いてすぐに皇帝陛下だと分かった。
失礼のないようにすぐに頭を下げた。

「手入れも行き届いていても、綺麗だと思います」
「そうか」

仮面の下で少し笑ったような気がした。
はっとして自分が名乗っていないことを思い出した。

「ラヴィ・グラスといいます。しばらくの間こちらでお世話になる
ことになりました」
「顔をあげてくれ」

そつと肩に置かれた手に驚いたけど恐る恐る顔をあげた。

「広大な自然に囲まれたノリツから来たのだろ。帝都はどうだ」
「都会、と言った感じです。ノリツよりも広くて賑やかで」
「そうか。ここには馴染めそうか？」

こくりと頷くと周りの雰囲気は穏やかになった。
ああ、まるでこの方の機嫌を表しているかのよう。

「陛下、ラヴィ様。こちらへどうぞ」

クロエ様に呼ばれて行くとお茶の用意がされていた。
もしかしてクロエ様をご用意されたのだろうか。
向かい合うように座るといろいろとお話をした。
帝都のことだったりノリツのことだったり。

「明日、クロエに城内を案内してもらうと良い。頼めるか」
「かしこまりました」

そろそろタイムリミットのように陛下に一礼してからクロエ様と共にその場を後にしようとして足を止めた。

「どうされましたか」
「いえ……」

名前を、呼ばれた気がしたのだけど気のせいだったかな。
先程来た道を戻りながらクロエ様はどこか満足げな表情だった。

「それにしても安心しました。やはりラヴィ様を帝都にお呼びしてよかったです」

「ですが……陛下が探されているのはその、思い出のかた、
なんですよ？ あたしがここに来て本当に良かったのでしょうか」

そう言っているとクロエ様は少し慌てたような表情へと変わった。

「だ、大丈夫です！　と言つか貴方でなければ困るといつか・・・」

「え？」

「あ、い、いえ。　明日の城内のご案内ですがいつ頃にいたしましょうか」

なにやらみなして言葉を濁すことが多いような。

「あたしはいつでも大丈夫です。クロエ様のお時間のあるときで構いません」

「そうですか、分かりました」

部屋の前まで着くと軽く頭を下げた。

「送ってくださいありがとうございます」

「いえ。それでは私はこれで失礼します。ごゆっくりお休みください」

室内に入るとすぐに化粧を落として寝巻きに着替えてベッドにはいった。

いろいろあつて疲れていたのかすぐに眠りについた。

皇帝陛下という人は思っていたよりも表情が豊かな人だった。

表情と言つても仮面の下ではぼろぼろ見ることはできないがまとつている雰囲気の変化を読んだと言つか。

どのくらい、ここに滞在することになるのか。

これからどうすればいいのかわ不安はたくさんあつたけどみんな優しい人ばかりできつと頑張れる気がした。

陛下との顔合わせ（後書き）

PV30000アクセス、ユニーク100000人近くて本当にびっくりしています。

なんだろう、物凄く頑張らなきゃ！

兄たちの思いその？（前書き）

兄たちの思いを少しばかり割り込み投稿させていただきました。

誤字修正しました。ご報告ありがとうございます！

兄たちの思いその？

ラヴィが帝都に旅立ってからというものの考えるのはラヴィのことだけ。

今はどうしているか、城での生活はどうだろうかなど。

四兄弟の末っ子にして唯一の女子であるラヴィの誕生は両親だけではなく自分たちもとても喜んだ。

両親が仕事で遠くにいたので面倒を見るのは兄である俺たちと少しの使用人たち。

歳も離れていたせいか思いっきり甘やかして育てた。

過保護と言われてもしかたないぐらいラヴィは可愛い。

「ラヴィ、大丈夫かな」

「なにかあつてもきつと誰にも言わずに耐えてしまつから余計に心配だ」

皇帝陛下の皇妃候補なんていう降つて湧いた話をもちろん俺たちは拒否した。

例えば皇帝陛下だろうとなんだだろうとそんな様々な思惑の渦巻く場所になどやりたくなかった。

まさか妹のいるであろう朝の時間帯にまた訪れるなどとは思っていなかった。

あの時にしっかりと客が帰るまで部屋から出るなということ伝えていたら、今は違っていたかもしれない。

だがそれはもう後の祭りでラヴィはここにいない。

「ラヴィのことだ、向こうでも無意識に味方を増やしているだろう。その中に信頼のおける人間がいればいいな」

周りを元氣付けるほど明るくて誰にでも優しい自慢の愛妹。

その笑顔は初対面の人間でさえ簡単におとしちゃうほど魅力的で愛らしい。が、本人にその自覚はない。

そんなラヴィに何故今まで縁談などが浮かび上がらなかったという俺たちががちりガードしていたからだ。

「ずっと僕たちが護ってきたのに」

「そろそろそういう話が来ても可笑しくはない年齢になったのは分かってたんだけどなあ」

はあああつと重いため息をつく。

いずれは嫁に行ってしまうだろうという思いはあったが選ぶのなら近場の人間にして欲しいと望んでいた。

そうすればいつだって会いにいけるし帰ってこれる。

「ラヴィにとって今まではノリツが中心だった。帝都はここよりも広くて便利だ。だが・・・あの子が頷くと思うか？」

「思えないかな。しかもあの文言だし、ラヴィは一度断ったようなものだ」

「っていうか怪しかったよな・・・」

やはりそう思っていたのは俺だけじゃなかったようだ。

突然の訪問からあの文言まで。怪しいことこの上なかった。

理由は、なぜ帝都から離れたノリツにわざわざ皇妃候補を探しに来るのか。しかもピンポイントで家に。

「一国の若き宰相が出てくるってことはそれだけ切羽詰っていたってことは伺える。けど、明らかにおかしいよね。ラヴィが言ったとおり、慣れればいいのだと考えているのなら、なにもノリツまで来なくていい。もっと近場にいくらでもいるはずだ」

「とってつけたように思い出の人の話が出たっけな。あれも本当だと思えるか？ ラヴィの同情を引くための嘘だとしたら俺は宰相も皇帝も許さない」

その思い出の人に関する詳しい話は聞かなかったが帝都で情報を探れば出るか？

「その辺は探ってみるとしよう。どんな理由にせよ、ラヴィが戻ってきたときに優しく迎え入れよう。それが家族としての俺たちの役目だ」

「そうだね」

「ああ」

少し落ち着いたあたりに手紙を出して近況を聞くか。無理をしていなければいいが・・・。

まるで別世界（前書き）

呆れるほど一話一話が短めですみませんorzどこで区切って良いのか分からなくなると言うか・・・;;;

まるで別世界

早くに目が覚めてしまつて持つてきていた本を読み返していた。するとノックをする音がして返事をするシルビアさんがはいってきた。

「まあ、ラヴィ様は早起きですね」

「目が覚めてしまつて……」

昨日はぐっすりと眠れたために寝起きも良かったのだ。

「そうでしたか。せっかくラヴィ様の寝顔を拝見できると思つたのですが……残念です」

まさかそんなことを言われるとは思つていなかった。
寝顔を見て何か良いこともあるのかな。

「今日はクロ工様に城内を案内していただくんですよね」

「はい。とても広くて迷つてしまわないか凄く不安ですけど」

「きつと大丈夫ですわ」

少ししてカートを押してマーガレットさんがやってきた。

美味しい紅茶をいただきながら至れり尽くせりはこういうものなのかな、と思つていた。

クロ工様から昼食後と言う連絡が来て少し不安な気持ちになりながら待つていた。

城内で働く人たちに私はどういった存在として知らされているの

か。

呆然とするしかないほどお城は広がった。

説明を聞いていはいるんだけど覚えられそうにないと言うか。

「ここが図書室になります。陛下から自由に出入りしても良いという許可をいただいています」

「え、いいんですか？」

「はい」

持ってきていた本は読み終わってしまったし時間をどう潰そうかと思っていた。

さっそく中には入らせてもらうとやはり別世界。

「すごい………」

開いた口が塞がらない。

とても高い本棚と大量の本や書物。

「中には貴重な本などもありますので持ち出し出来るかどうかは司書にお尋ねください」

「ここで読書をして大丈夫ですか？」

「はい。ですが、ラヴィ様は大事なお客様ですから護衛のものをちゃんと引き連れてください」

そう言われると少し不安になるのですが。

「あの、あたしのことはお城で働いてる皆様はご存知なんですか」

「今はまだ一部の者しか知りませんが、いずれは知られることになると思います」

その知られる日というのはあたしがお城を出る日？
それとも……あたしが、皇妃候補になったとき？

「今日の城内のご案内はここまでにいたしましょう。ラヴィ様はお部屋にお戻りになれますか？」

「少し、ここを見てまわりたいのですが……」

「分かりました。では護衛のものを一人残しますので帰りの際は彼に声をかけてください」

「はい」

クロ工様と別れて図書室内を歩いてみる。

いろいろな種類ごとにきっちり分けられていて分かりやすい。

一日中ここで過ごしても良いかなとか考えていた。

手ごろな本を数冊手に取ると司書さんの元へと向かった。

「すみません」

「ああ、貴方が……クロ工殿にお話は伺っております。なに
かお困りですか？」

「い、いえ！ 本の持ち出しをしたいのですが……」

話をしてみると司書さんはとりあえず優しい人だと思った。

「お帰りはお気をつけて」

「ありがとうございます」

頭を軽く下げてから微笑むと残っていた護衛の人と共に図書室を後にした。

「あの子が陛下のか。お似合いじゃないか。ああ、生きているうちにあの内氣皇子の嫁が見られるとはなあ」

司書がそんなことを零しているなんてラヴィは知る由もなく。

部屋に戻ってきてからはずっと本を読んでいた。
やっぱりこの時間が一番落ち着ける。

改めて自分が暮らしてきた環境との違いに驚かされた。

「というかあたしこれからどうするの………?」

陛下とはあつたけどこれからどうなるとかなにも分からない。

ああでも、初めて会ったような気がしなかった。

何処かであったことのあるような雰囲気。

相手は皇帝陛下だしあたしはノリツから出たことはほとんど無い。
ならば一体どこで………?

「失礼いたします。」

ノックの音に返事をするマールガレットさんがはいつてきた。

「ラヴィ様にお手紙が届いておいでです」

「ありがとうございます」

受け取ってみると兄からだった。

こちらでの生活に関してとか不満はないかとか。

兄たちは末っ子のあたしを可愛がってくれるのは嬉しいけど少し過保護なところがある。

さっそく返事を書くことにした。

不満も困っていることもないしみんな優しくて良い人たちばかりです、と。

まるで別世界（後書き）

勘のいいかたはすでに気付かれているかもしれませんが。
そうです、ラヴィが陛下に会うのは初めてではありません。

綺麗な華には棘がある（前書き）

> P V 6 0 ' 0 0 0 、 ユニーク 2 0 ' 0 0 0 人 あり が と つ い ぞ い ま す
<

綺麗な華には棘がある

お城に滞在を初めて早数週間。

図書室に本を返して新しいのを借りに行こうとしたら綺麗な人と出くわしました。

なんだかとても不機嫌そうです。

あたし、初対面ですがなにかしましたか。

「……貴方がわざわざ田舎から来たという皇妃候補の方ね」

えつともしかしてどこかの貴族のお嬢さんでしょうか。

あたしのことは一体どこから漏れたのですか。

「一体どんなことをなさったのかしら。貴方のような方があの方の隣に立てるとでも思っているの？」

一応お試しということどこに居るんだけどそれを言ったらもつと機嫌を損ねてしまいそう。

「どうせいずれ尻尾を出すでしょう。そのときが楽しみだわ」

なにも言わなかったことも機嫌を損ねてしまったらしく捨て台詞と取れる台詞を残してその人は去っていった。

クロエ様こっぴどいのは計算のうちなのでしょうか！？

「ラヴィ様がお気になされる必要はありませんわ」

「その通りです。くれぐれもおひとりで行動なさるようなことはさ

れないように」

「はあ」

シルビアさんと護衛についてくれているシトラスさんの言葉にあまりに頷いた。

ひとりで動くなんてとんでもない！

絶対に迷子になってしまうから。

「おはようございます、ロットさん」

図書室に來ると司書のロットさんに挨拶する。

「おはよう、ラヴィちゃん」

ロットさんに最初の頃みたいな敬語をやめてもらった。

何度も図書室で会っているし本当は敬語を使われるような立場じゃないからって。

図書室で本を探しているとさっきの人とはまた違う綺麗な人が現れた。

もしかしてさっきと同パターンでしょうか。

「貴方、ご自分が思っているほど目立っているということを知らないんですのね。貴方の正体は上の方々しか知らなくとも、護衛を引き連れているぐらいだからけっこうな噂になっていますのよ」

そうですよね。

それは実はあたし自身も思っていたことだった。

「勘違いしないでいただきたいのですがあたしは皇妃候補としてここに來たわけではありません」

「ええ、お話は伺っておりますから知っておりますわ。貴方、陛下のお顔は拝見されたかしら？」
「いいえ」

一番重要な素顔の陛下とは一度も会っていない。

「この帝都に住む貴族の娘たちは幼い頃からあの方の隣に立つに相応しい人物になれと言われて育てられてきましたわ。上層部の人たちは慣れればよいとお考えのようだけれど、慣れるなど到底無理な話ですわ。クロ工様のように最初から耐性でもない限り一生添い遂げるなど、ましてや思い出の方しかいらないとと言われるあの方の隣に立つなど無理に決まっています」

この方は一体何を言わたいのでしょうか。
ひとつだけ分かったのはクロ工様は最初から陛下の素顔を見ても大丈夫だったということ。

「誰でも自分を見て欲しいと思うのは当然のことですわ。それにあの方は皇帝陛下というこの国の頂点に立たれているお方。寵を受けたいと思う人間は腐るほどいます。そんな中で過ごすのが無理だと思うのなら早くお帰りになられるべきだわ」

遠まわしだけど先程あった方と同じことを言いたかったみたい。
要はあたしなんか隣に立てるような人じゃないからさっさと帰れと。

「ご忠告ありがとうございます」

たぶん本人にそんなつもりはないと思うけれどぺこりと頭を下げた。

「ノリツからほとんど出たことのないあたしが陛下の思い出の人であるはずがありません。ですから近いうちに帰ることになると思います」

そう言つと驚いたような表情をされた。

「貴方、なにも聞いていないんですの？」

「なにがですか？」

聞いていないことの方が多いと思うんですけど。

「・・・・・・・・いえ、なんでもありませんわ」

なにやら考え込んでしまったこの方を放っておくわけにもいかず。とりあえず黙ってそのまま立っていた。

「わたくしはアイリス・ヴァンディッツと申します。貴方のお名前は何？」

「え、あ、えつと、ラヴィ・グラスと言います」

聞かれたので答えただけ答えてもよかったんだよね？

「また、お会いすることがあるかもしれませんが。くれぐれもお気をつけになられて。貴方の存在は嵐の目になりそうですもの」
「は、はい」

そう言つとアイリスさんはいなくなってしまった。
首を傾げながら本を借りて部屋へと戻ってきた。

「あの、シルビアさん。」

「なんでしょうか、ラヴィ様」

「図書室に行く前にあったあの方はどなたなんですか？」

聞くととても困ったような表情をされていた。

あたしはなにか言いづらいことでも聞いてしまっただろうか。

「あの方はオンドバル伯爵様のご令嬢でカルディナ様です。ご自分が陛下の皇妃候補から外されたことをとても根に持っておられて、同じような貴族のご令嬢を苛められていたという噂もあります。

ラヴィ様、あの方ともしお会いされたら十分気をつけてください」

アイリスさんと同じことを言われてしまった。

生まれたときから陛下の隣に立つに相応しい人物になれといわれて育ってきたのに陛下には思い出の人がいる。

ぼっと出の人間を気にいるはずがない。

「ラヴィ様、絶対におひとりになるようなことはしないでください。陛下がお選びになられたのは貴方なのですから。そうですわ」

何かを思いついたようにシルビアさんはぼんっと手を叩いた。

「明日のご予定はこの前と同じ時間に陛下とのお茶会がありますが、それまでは予定がありませんからもしよろしければ私どもの仕事を見学なさりませんか？ 私の仲間たちもラヴィ様にお会いしてみたいと言っておりますから！」

力説されて頷くと嬉しそうに微笑んだ。

陛下とは時間のあるときにお茶会をすることになっていた。

それも知られたらきつともっといろいろ言われてしまうのだろう

か。

でも言われても仕方ないような不安定な位置にあたしは立っている。

笑顔の魅力（前書き）

お気に入り登録500件、PV9万越えありがとうございます！<

ご指摘ありがとうございます！訂正させていただきました・・・！
！

笑顔の魅力

シルビアさんとマーガレットさんと共におふたりの仕事場の見学へときていた。

「今日ラヴィ様をお連れすると申し上げたらみな喜んでおりましたわ」

「どうしてですか？」

「私たちがいろいろとお話をするのでラヴィ様にとっても興味をお持ちなんです」

少しドキドキしながらついていく。

「では、参りますか」

「ええ」

ふたりが扉の取っ手を掴むと勢いよく同時に開いた。中にいた人たちは呆然とした様子で止まっていた。

「うふふふふっ」

「約束の通りラヴィ様をお連れしたわよ？」

悪戯が成功したとでも言うように楽しそうに二人は笑っている。呆然としていた侍女さんたちは言葉を理解するや否や詰め寄ってきた。

「マーガレットとシルビアからお話は伺ってありました！」

「お会いできて光栄です！！」

「えっと、あの……ラヴィ・グラスと言います。はじめまして？」

僅かに首を傾げながら微笑むと黄色い歓声があがった。

何故……？

「ラヴィ様の最大の武器はその笑顔ですから」

「ええ。ラヴィ様の笑顔は最強です。その笑顔を失わせないように私たちは尽力させていただきます」

二人の言葉にまたもや首を傾げるしかなかった。

一気に慌しくなった室内に申し訳ないけど促されて席に座った。

「ふたりに聞いていた通り、本当に愛らしくて抱き締めてしまいたくなります！」

「お肌も艶々だし髪もさらさらしていらっしやるし……」

なんだか人形になった気分です。

一通り触られたあとはみんなからいろいろと質問責めにされた。

「ラヴィ様はご兄弟などはいらっしゃるのですか？」

「兄が三人います」

「まあ、お兄様が三人も？ でしたらラヴィ様はとても可愛がられたのですね」

可愛がられたというか過保護と言っていていいほどだった。

「ですがラヴィ様のような愛らしい方が妹だったらきっと私もそうなっていたかもしれないわ」

「社交界などにはお出になられなかったのですか？」

少し回想してみてもうくくりと頷いた。

「兄たちが出席するときしか出たことはありません。出てもあまり踊ったり話の輪に加わったりはできなかったのです」

「男性からお声をかけられたこともないのですか？」

「はい。常に兄が傍にいましたから」

「お兄様方がラヴィ様をお嫁に出したくなかったという気持ちがよく分かりますわね」

でもあたしにつきつきりなせいで兄たちにも良い人が見つからなくて。

もしかしてあたしが知らないだけでお兄様たちにもちゃんとした人がいるのかな。

それなら紹介してくれても良いのに。

いい関係を気付けるかどうか分からないじゃない。

「なにか困ったことなどがありましたらご遠慮せずにお申し付けください！」

「私たちはラヴィ様の味方ですから」

「あ、ありがとうございます」

けっこう長居をしてしまったので仕事の邪魔にはならなかっただろうか。

途中で何人かが名残惜しそうに仕事へとむかっていったけれど。お昼になる前に自室へと戻ってきた。

「どうでしたか？ ラヴィ様。」

「とても楽しかったです。みなさん良い人ばかりで」

「それはよろしかったですわ。そうでしたわ。ラヴィ様は大事なお

お客様ですから私どもに敬語を使う必要はありません」

そうは言われてもあたしにとったら彼女たちは目上の人だ。

「お話しやすい口調で全然構いません。そのほうがラヴィ様と打ち解けられたという実感も湧きますから」

「分かりました。あの、でも、敬称はこのままでも構いませんよね・
・・・？」

「ラヴィ様にお任せいたします」

敬称はそのままにして口調を普通どおりに。

あ、でも陛下やクロエ様の前ではちゃんと今までどおり接する。
そう心に言い聞かせた。

間違えてしまったらとんでもないことになってしまいそうだ。

お昼を済ませると夕方まで刺繍していた。

「このお花は見たことがありませんが、なんというお花なのですか
？」

「ノリツの近くに大きな湿原があつてそこに咲いている花なの」

時期が来ると湿原にはこの花が咲き誇る。

その時期に観光に来る人たちが一番多いのだ。

それはそれは見事なもので毎年来ている人もいるぐらいなのだ。

「名前はなんだったかしら。一度教えてもらっただけど・・・・
」

庭園に同じ花が咲いていたけれど陛下は知っているかな。

「もうこんな時間ですわ！ラヴィ様、急いでご支度なさらないと」
「え、うん」

前回と同じパターンでなんとか湯浴みはひとりでいいと説得して着せ替えられて綺麗にお化粧されて準備が終わった。

「久方ぶりだな」

「はい。お久しぶりです」

このお茶会以外で陛下と会ったことは一度もない。
それほど忙しい方なのだろう。

「今日は庭園の散策でもするか」

「いいんですか？」

「ああ」

陛下の二・三步後ろを歩いてついていく。

恐れ多くて隣を歩くななんて出来るはずがない。

そしてあの湿原に咲いているのと同じ花の前までやってきた。

「ノリツの近くに大きな湿原があるのはご存知ですか？ この花はその湿原に群生している花と同じ種類みたいです。 春の終わりがくるとから夏の初めにかけて綺麗な花を咲かせるのでその時期に観光に来られる方がとても多く、毎年見に来られる方がいるくらい凄く綺麗なんです。 ですが、夏の終わりごろの夜に湿原に足を運ぶ人も多いんです」

「それはなぜだ？」

「水の水質が良くてとても綺麗なので蛍がやってくるんです。お月様の光がないときは蛍の僅かな明かりだけなのでとっても幻想的なんですよ」

その光景を思い浮かべてふふつと笑う。

よく兄たちと共に湿原へとわざわざ足を運んでは見とれていた。

「蛍か……見たことがないな」

「でしたら機会がありましたら是非お訪ねください。そのときはご案内させていただきます」

微笑みながらそういうと僅かに陛下の雰囲気揺らいだのを感じた。

伸ばされた手が髪に触れると何度か頭を撫でられた。

「その笑顔を見ていると心が安らぐ」

「……………」

「お前は太陽のようだ」

その言葉にどきりとした。

湿原で出会った少年に言われたのと同じ台詞。

「同じことを昔湿原で出会った男の子に言われたことがあります。彼は自分を月だと言っていました。月はひとりで光ることは出来なから自分にぴったりと。月は太陽光を反射して光りますよね？太陽がいなければ月は光ることが出来ません。会ったのはその一回きりなのですが、たまに思い出すんです。彼は支えになってくれる太陽を見つけたのでしょうか……………」

とても悲しそうな瞳をした人だった。

自分を月だと称したあの人を支えてくれる太陽にどうか出会えて
いますように。

「もう、見つけている」

陛下がぼつりと零した言葉は聞き取ることが出来なかった。

笑顔の魅力（後書き）

というわけで他の侍女の方々との対面。

ラヴィは兄たちに護られていたので自分の魅力と言うものを理解していません。

天然で怖いですね！

自分が戻ることを前提で話しているラヴィに陛下は思いっきり動揺しています。

ここからふたりの距離を縮めていけるようなエピソードを……
エピソード、dor z

ええつと、もしよろしければ感想や誤字・脱字のお指摘などいただけましたら嬉しいです、なんて。

星に願いを

どうしてか眠れなくて部屋を出て近くのテラスまで来ていた。
わずかに灯る街の明かりにノリツが懐かしくなってきた。

まだこっちに来てそんなに経っていないしまだどうなるかは分からない。

「そこにいるのは誰だ？」

声がしてびっくりして勢いよく振り返る。

立っていたのは先程会った時よりもラフな感じの衣装をまとった
陛下だった。

「あ、あの……」

「ラヴィか？」

突然名前で呼ばれて頬が熱くなるのを感じた。

「は、い」

お茶会以外の、それも夜の時間帯に会うのは初めてで緊張からか
胸が高鳴る。

傍まで歩み寄ってきた陛下に頭を下げようとしたら制された。

「周りに咎めるものはいないから必要ない」

何を話せばいいのだろう。

困惑気味に空を見上げていたら月が見えた。

「確か、陛下のお名前にあるチャンドラとはある地方では月を指す言葉なのですよ？」

「ああ。よく知っているな」

「天文学を勉強していたことがあってそのときに知ったんです。あたしの名前もその地方では太陽を指すときに使われる言葉のひとつなのだそうです」

そう言うとき少し驚いたような様子が見て取れた。

「これも運命か。まさか月と太陽が会おうとは」

本来であれば追いかけることをしているふたつが出会うことはない。たまに日食や月食という現象が起きるけど。

「ラヴィは勉強熱心だな。図書室にも良く足を運んでいると聞いた」
「本を読むことが大好きなだけです。得られる知識は本によってまったく違います。あたしは自分の興味のあるものを読んでいるので偏ってしまっていますけど……」

とても穏やかな時間が流れていて居心地が良いと思ってしまう。

「本当に小さい頃はあまり外に出ることが出来なくて、本でも読んでいないと時間を潰せなかったんです。外で遊ぶことで得られることって多いですけど、本から得られることも同じくらい多いんですよ」

本当に小さな頃は病弱で外に出ることも出来ずにずっと本ばかりを読んでいた。

それも一時のもので少しずつ外に出られる時間も増えていき今では心配は要らないと言われている。

だから思いっきり外に出られるようになったときあたしは馬に乗りたいとワガママを言った。

ずっと兄たちを見て憧れていたから。

「時期を見て遠乗りにも行くか」

「ふえ？」

考え事をしていたせいで気の抜けたような返事をしてしまいハッとして口を手で塞いだ。

陛下は笑うのを堪えるような感じで口元に手を当てている。

笑いが収まったのか口元から手を外して再度問いかけてきた。

「今度、遠乗りにも行くか」

「いいんですか？」

「ああ。ずっと城の中で過ごすのは退屈だろう」

そつえばあたしが乗馬をすることは知られていたんだった。

「はい、楽しみにしています」

ふつと目の端を星が流れていくのが見えた。

「流れ星……？」

空を見上げたときにはもう消えていた。

「流星か」

「そつえば流れ星が消えるまでに願い事を3つ唱えると願い事が

叶うというお話は有名ですね。もうひとつ、違った意味のお話があるのはご存知ですか？」

「いや、どういふ話があるんだ？」

有名なのは願ひ事。

それともうひとつ流れ星には意味があるのではないかと言われていた。

「流れ星は誰かの命が消えようとしている象徴。とある地方ではそういう捉え方もあるのだそうです」

「どちらにせよ儚いものだな……」

空を見上げて言う陛下の横顔はどこか切なそうだった。

ふたりで見上げた星空にまた流れ星が流れていった。

どんな願いを込めたのかは星のみぞ知る。

星に願いを（後書き）

今回、いつもより短いです＼（＾o＾）／

文中に出てきたとある地方というか言語になるのでしょうか。

サンスクリット語で月をチャンドラ／ソーマと呼び、太陽をスーリヤ／アーディッテヤ／ラヴィと呼びます。

というわけで陛下の本名は本文にはまだ出てきておりませんがアルフレッド・ウォルト・チャンドラ・アラルガントとなっております。

ここでようやく陛下はラヴィの名前を呼ぶことに成功しました（笑

ちなみに流れ星のお話は中国です。

綺麗な華再び

「ラヴィ様、お手紙が届いております」

「ありがとうございます」

受け取った手紙は2通あった。

ひとつは兄からでもうひとつは差出人の名前が書かれていなかった。

不思議に思つて裏返してみると封をとめるために蝋が使われていた。

「あのマーガレットさん」

「なんでしょうか？」

「この家紋はどちらのものか分かる？」

蝋に焼き付けられている家紋はあたしが見ただけで分かるはずがない。

「これは……ヴァンディッツ公爵様のものです」

確か図書室で出会った女性がその姓を名乗っていた。

「黙っていてごめんなさい。図書室で一度、アイリスさんという方にあつたの」

「アイリス様に？　そうでしたか……」

なんだか困惑したような表情をしているんだけど。

「それでお手紙にはなんと？」

言われて封を切り、便箋を取り出した。
とても女性らしい繊細で綺麗な字で書かれていた。

「お茶会への招待状みたい」

あの時一度会ったきりでたぶんあちらはあたしを良くは思っていない、と思う。

それでもさっそくお誘いしていただいたので断るのも……。

「アイリスさんはどのような方なの？」

「アイリス様は陛下とクロエ様の幼馴染になります。そして……
・皇妃の最有力候補であらせられました」

「そう、なんですか……」

あの人が陛下の。でも過去形ってことは今は違ってたことなのかな。

「やっぱりせつかくお誘いいただいたんだし行かないのは失礼よね。
うん、行きましょう」

出席のお返事を出してすぐに準備に取り掛かってもらった。

一応クロエ様に伺ってみることにしてクロエ様を尋ねた。

「アイリスが、ですか？」

「はい。前に一度図書室でお会いしただけなんですけど……」

なにやら顎に手を当てて考え込んでいたけど少ししてからひとつ、
頷いた。

「アイリスなら大丈夫でしょう。心配はいりません」
「は、はい」

クロエ様は心配いらないと言われているしあまり気を張らずに頑張ろう。

冷静に、気楽に明日を乗り切ろうと決意したのだった。

そして翌日、約束していた時間より少し早く到着した。
相手を待たせるなんて言語道断、もつてのほか！と礼儀同様に教え込まれていた。

「本日はお招きいただきましてありがとうございます」

スカートの裾をわずかに持ち上げて頭を下げる。

「どうぞお座りになってください」
「失礼します」

なんだかじーつと見られている。視線が突き刺さるといつか、でも嫌な感じのするものではない。

「急にお呼び出してしまつてごめんなさい」

「いえ、予定は特にありませんでしたから」

少し気まずいながらもあたしとアイリスさんのふたりでお茶会がはじまった。

いろいろとお話を聞いたり聞かれたりしながら穏やかに時間は流れている。

「あ、あの聞いてもよろしいですか？」

「なんでしょうか」

マーガレットさんに聞いた例のことをどうしても聞きたかった。

「あの・・・」

聞いても良いことなのか分からずに言葉を濁す。

もしも断られたのならそれ相応の理由があるけれど、あたしなにかが聞いても良いもののかな。

「おつしやりたいことは分かりますわ。わたくしがなぜ、皇妃候補を辞退したのか、ではないのですの？」

やっぱり気付かれていたのかとこくりと頷く。

「どうして・・・お断りになられたんですか？」

「幼い頃から傍で見えておりますから陛下は兄のようなものですわ。

昔の変わられる前の陛下も知っておりますし、わたくしは自分よりも美しい顔の人の隣になど立ちたくありませんもの」

あっけからんとした様子で言い放った。

確かその言葉をどこかでも聞いたことがあると思い返してみれば、

クロエ様と初めて会った時に言われていた。

「そ、その言葉はアイリスさんが言われたものだったんですね」

「わたくしも少しは耐性がありますから周りからしてみれば一番望ましかったのでしょうか。それにわたくしの母は前皇帝陛下の妹で陛下の叔母にあたります。つまりわたくしと陛下は従兄妹ですからただちようどよかっただけですわ」

家柄も身分も申し分がなく、それにとっても綺麗だし陛下の素顔も見慣れているし耐性もある。

もしかしてそんな人に断られてしまったから誰でも良かったとか？だから慣れれば良いと思って探し回った結果、あたしに回ってきた？

考え出したらきりがなかった。どうしても後ろ向きに考えてしま

う。
「慣れれば良いとお考えなら、あたしじゃなくても良かったはずですよ」

ぽつりと呟くように言葉が落ちていった。

どうしてお城の人たちは普通に皇妃候補としてあたしを扱うのかよく、分らない。

アイリスさんが物凄く重いため息をついていた。

「
え？」

なにやら呟かれたみたいだけどなにを言ったのかまでは聞こえなかった。

「慣れればいいのだというのは周りの意見にしか過ぎませんわ。本人がそう思っているのだしたらわざわざノリツまで行かれるかしら？」

そう言われても思い当たる節がないのですが。

「陛下とはお会いになっっているんですの？」

「あ、えっと、時間のあるときに。お話をしたりお庭の散策をしたりは……」

遠乗りに行く約束も、この前夜にテラスでお会いしたときにした。

「仮面は確かに有効なのですが、なにを考えているのか分からないともよく言われておりますわ。あまり表情が読めないでしょう？」

「それはそうですけど……雰囲気でなんとなく分かるので」

え？　なんだか信じられないという表情で見られている。

「雰囲気です？」

確認するように問われてこくりと頷いた。

「ど、どういった感じですか？」

わずかに首を傾げながら説明する。

「えっと、嬉しそうなときは雰囲気が穏やかになったり、困惑というか動揺したときはたぶん雰囲気が揺らいだり？　そ、そんな感じですけど」

他の人もてつきりそんな風に陛下の表情を読んでいるんだと思っ
ていた。

クロ工様はなんとなく予想をつけてって感じに見えたけど。
じゃなきゃ他の皆さんはどうやって読んでいるのかな。

綺麗な華再び（後書き）

あれ？ アイリスがめっちゃ核心に迫ること言ったのにこの子気付いてないよ＼（＾o＾）／

ラヴィは自分が言ったとおり、お試しでここに来ていると、いずれはノリツに帰るのだと思っています。だから自分は皇妃候補ではないと言っています。なのに周りが皇妃候補として扱うことを凄く戸惑っているのです。
どう考えてもクロエの最初の説明&言い訳と陛下がはつきりしないせい。

アイリスとのお茶会はもう一話ほど続きます！

綺麗な華再び？

驚いた表情でいたかと思うとまたなにやら呟いていた。

ええっとそんなに驚かれることだったのでしょうか。逆に不安になつてきます。

「貴方には本当に驚かされますわ。そんな風に陛下のことを理解する人は今までおりませんでしたもの」

「そ、そうなんですか」

あまり良くは思われていないと思つていたのはあたしの勘違い？
そう思つほど最初に会つた時のとげとげしさは感じられない。

「なにを考えているのか読ませない方が良い方々がいるのも確かですし」

ええっとお仕事関係の話はされてもよく分からないのですが。
今度、お仕事をされているところを見てみたいと言つたら許していただけるかな。

こっそりクロ工様に伺つてみよう。

「昔は外に連れ出すのはわたくしかクロ工様の役目でした。そうでもしなければ部屋に籠つてでてこないんですもの」

どこか懐かしそうにアイリスさんは幼い頃の話をしはじめた。

「本当に今とは正反対で、引つ込み思案で内気でスザンヌ様の後ろに隠れられていることが多かったんですの。年の近いものは城内にはほとんどいませんでした。それで年がひとつ違いということでクロエ様がお呼ばれになったんです。クロエ様も宰相になられてからあのような柔らかな感じになったんですけど、前はもっとやんちゃな方でしたわ」

あのクロエ様が？ やんちゃだったなんて思えないほどの落ち着いたきぶりなのですが。

ちなみにスザンヌ様は陛下のお母様です。若くして亡くなられたと聞きました。

「本当に仲が、よろしかったんですね」

陛下とクロエ様とアイリスさんの三人で遊んでいらつしやる姿は思い浮かべられないけれど。

あたしが知っているのは今の三人だから。

「ええ、そうですわね」

少し表情がくもったかのように見えた。

「みな、変わられてしまって・・・変わらないのはわたくしだけですわ・・・・・・・・」

表情に影を落としながら少し悲しそうにぽつりと零した。やはり綺麗な人はそういう憂いげな表情もさまになっている。でも変わらないのはいけないこと？

「変わらないのは悪いことじゃないと思います」

変わっていくものの中で変わらないものを見つけるとどこかほっとした気持ちになるときがある。

悪いのは立ち止まり続けることで変わらないことじゃない。

「……アイリスさんはあたしのことをあまり良く思われていないかもしれませんが、もしよければあたしとお友達になってもらえませんか」

ぼろつと零れ落ちた言葉に自分でも驚いていた。

先程の憂いげな表情からいってん、呆氣にとられたような表情をしている。

「別にわたくしは貴方をよく思っていないわけではありませんわ。貴方の選択肢はひとつではないということを示しただけです。本当に……変わった人」

選択肢？ それはつまりお城に残るかお城を去るかのどちらかってことですね？

それ以外の選択肢ってあるんですか。

「友達、そんな風に言われたのも初めてですわ。だいたい心中で何を思っているか分からない人ばかりの世界ですもの」

「あたしはこっちには知り合いません。マーガレットさんやシルビアさんもとて優しくしてくれますし、あたしを気遣ってくれます。でも、良いところは良い、悪いところは悪いと言ってもらったほうがあたしは嬉しいです。自分が気付いていないところを直していくには周りの人たちの言葉が一番ためになると思うから」

「それでわたくしのその役を頼みたいと？」

「はい。きっとアイリスさんなら厳しく言ってくださるんじゃないかと思って……駄目ですか？」

今までお兄様たちに護られてきて、甘やかされてきたから。自分で気付けないことを放っておきたくない。

「分かりましたわ。わたくしは厳しいですわよ？」

「はい、よろしくお願いします！」

本当に嬉しくて微笑んだ。帝都には知り合いは誰ひとりなくて、話を出来る人もマーガレットさんやシルビアさんだったり陛下だったりと限られていたから。

「こづいづのをほだされたっていうのかしら」

アイリスさんが呟いた言葉に首を傾げる。不思議に思っているとくすくすと笑い出した。

「ごめんなさい。少し思い出してしまつて」

お友達になれたので少し気まづかったのも緩和されたみたいでいろいろとお話が出来た。

自分のことだったり陛下たちの幼い頃の話だったり。

「またこんなふうにお話してくれますか？」

「ええ、いつでも」

「今日は本当にありがとございました。すっごく楽しかったです！」

「わたくしもですわ」

お昼前にアイリスさんのお茶会を終えた。

「お帰りなさいませ、ラヴィ様」

「アイリス様とお茶会はいかがでしたか？」

部屋に戻ってきて今日聞いたお話のことだったりアイリスさんと友達になったことを報告した。

「余計なことを言ってしまったのではと気にかかっておりましたが、楽しかったのですからよかったです」

もうすっかりとそのことが頭から抜けていた。

現状が自分が思っているよりも難しいものでも、必ずしも望んだ結果になるわけじゃないから。

考えずにいられたらきつといいのに。

綺麗な華再び？（後書き）

自分の思いと周囲の思惑にはさまれ徐々に心で葛藤しはじめました。

やっぱりもう少しプロットを練ろうかなと思ってもいたり。けど、このまま進めて陛下視点での補足も考えていたり。後者の方が有力なんですけどね・・・。

兄たちの思いその？（前書き）

その？は割り込み投稿で6話に投稿済みです。
19万PV ありがとうございます／／！！

兄たちの思いその？

ラヴィが帝都に行つてから約ひと月が経つ。

手紙で近況の報告は来るがやはり心配でたまらない。友人が出来たのだと今回の手紙に書いてあつた。

あちらでも一応上手くやっているみたいだけど……。

「変わりはないみたいだね……」

「ああ。向こうでも友人と呼べる人が出来たみたいだしな」

皇帝陛下の思い出の人の件は嘘ではなかった。

嘘ではなかったけれどそれがラヴィである確証はまだない。

あちらがもし本気なのであるなら……いや、本気だからこそそのあの言葉なのか？

「本気でラヴィを皇妃に？　ならもう少しちゃんとした形式をとつてもらいたいところだね。いきなり現れてラヴィが困っている人を放っておけないのを知つてか知らずかあんな方法に出て。向こうに行つてラヴィが混乱するのは目に見えてるのに」

「お試しや客人つて言つたのは向こうからだ。それなのに向こうでは皇妃候補として扱われてもラヴィはきつと無下には出来ないだろう？」

卑怯だと思うよ、例え皇帝陛下でもね。

皇妃候補としての打診は正式なものじゃないし呼び戻そうと思えば僕たちはいつでも呼び戻せる。

ラヴィ本人がそれを納得すれば今すぐにだって。

「だがきつと途中で投げ出したりはしない。ラヴィのそういう優しいところは長所だが、優し過ぎるのは短所にもなる」

ラヴィの存在が未だに公にはされてない非公式なものだからまだいいのだ。

これが公式にでもなればラヴィは断れなくなる。

その辺の配慮はしっかりしているようだけどまだ足りないと思は思う。

あの子が自分の魅力に気付いていないのは僕たちのせいでもある。いるだけでその可愛らしさから人の目を惹く。

「社交界とかにも滅多に出さないから、あの子は自分に向けられている視線の意味を知らない。ううん、今だって知らなくてもいいと思ってる」

「知ったら逆に悩むだろ。まあ、自分に向けられる好意に気付いていないからなあ」

誰に似たのかラヴィは天然なところがあつて周りに気を配れるが自分に関してだけは気付けない。

だから護りやすかったというのもあるけど。

「思い出の人といえば……ラヴィにもいたよね」

ラヴィがまだ幼いときに家族全員で出かけた湿原。

観光地にもなっているあの湿原がラヴィはとても気に入っていて今でも一人で出かけていくほど。

「お月さまのお兄ちゃん、か」

「たった一度会っただけのやつをラヴィはずっと覚えてるんだよな」

本当に小さな頃は病弱で外にも出ることが出来なかったラヴィはいつも外で遊ぶ子供たちを窓から眺めていた。

それだけ湿原での出会いは忘れられない出会いだったということだ。

「もしも運命が存在するとしたら、その出会いが偶然じゃないとしたら・・・この誰とも知らない相手を思い続けるのかな？」

「今はまだ思い出の中の人物というだけで、特別な想いを抱いているわけじゃないだろ？」

「偶然再会して本人だと分かれば思いが変わりだす可能性は高い。吉と出るか凶と出るか・・・うちの可愛い妹さまは厄介ごとに巻き込まれる性質だな」

元からの性格があれだからね。

自分から首をつつ込んでしまうときもあれば本当に巻き込まれたというときもある。

どちらかといえば首をつつ込んでしまうことの方が若干多いかもしれない。

「僕たちだって自分たちの得意な分野でそれなりの人脈を広げてきたつもりだよ。やろうと思えばその相手を探してあげることだって出来るかもしれない。ラヴィが選んだのであれば僕は反対しない」
「それは俺たちだって同じだ。もちろん父さんと母さんも」

今は遠く離れている両親にも随時報告はしている。

なにかあれば帝都に向かうのが決まったときのように飛んで帰ってくるだろう。

本人もお試しと思っているから一度はノリツに戻ってくると思う。

「全ては可愛い妹のため」

頷きあつと決意を新たにした。

執務室ご見学? (前書き)

お久しぶりな上に短いです!
めorz

途中から割り込んだものは意外と短

始終クロ工視点です。

執務室へ見学？

「陛下の仕事姿が見たいと？」

アイリスとのお茶会から数日してラヴィ様が私の元を訪れてきていた。

心配は要らないと言ったがやはりアイリスのことだからなにか厳しいことでも言わないかと内心では心配していたがどうやら杞憂だったようだ。

それにしてもアイリスは何を言われたんですかね。ラヴィ様が私を見て首を傾げていた。

「え、はい。駄目、でしょうか・・・」

「いえ、そんなことはありませんが」

陛下の普段のお仕事をしている姿が見たいらしい。
これはいいチャンスになるかもしれない。

「そうですね。では見学しましょうか」

「ありがとうございます！」

「（さてさて、陛下には秘密で行きますか。言ったら仕事に手がつかないでしょうし・・・）」

ラヴィ様を連れてこっそりと陛下の仕事風景を見に行くことになった。

会うときは限られていて、そうなってくると見ることの出来る範囲が決まってくる。

「こちらです」

現在、陛下の執務室のすぐ隣の部屋にいます。

ここは来客などが来たときに使う応接室で、その扉をすこし開けた状態にしている。

そうすればわずかだが陛下の様子も見ることが出来る。

「少ししたら私も向こうに戻りますが大丈夫ですか？」

「はい。ちゃんと静かにしています」

本当にお試しではなく皇妃候補としてここにいてほしい。

ラヴィ様にそのつもりはないとしても。我儕を言っているのはこちらの方だ。

分かっているても、陛下がお選びになったのはラヴィ様だけ。

陛下がお求めになったのはこの太陽のような少女だけなのだ。宰相として、友人として、自分はそれを叶えてさし上げたい。

徐々に執務室へと人がやってきては出ていく。
真剣に執務に取り組む陛下の姿は一体どのように写っていることか。

「なんだか……全然違う人みたいです。お会いするときはいつも穏やかな雰囲気なので」

確かに仕事の際の陛下に穏やかなときなど一切ない。

政治は言葉ひとつで変わってしまうほどなので王は繊細な判断を迫られることだってある。

疲れた顔ひとつせず黙々と仕事に取り組んでいた。

「けど、新しい一面を見ることができて少し、嬉しいです」

これはいい方に進んでいるとしてもいいのだろうか。

「お兄様たちは自分の仕事に熱心でたまに食事も忘れてしまうことがあるんです。人々により良いものと考えて頑張っている姿を見ると、それだけ自分の仕事に誇りを持っているんだなって、あたしも出来るだけ手伝いたいって思うんです。なんでもいいから手伝うと言っても、どんなに疲れていたってあたしが笑っていてくれたらそれでいいって言われてしまうんですけどね……」

もしやお兄様がたと重ねられているだけだったらどうする。

ここはひとまず陛下の方に話を逸らして、いやしかし陛下本人がまだ話すつもりは無いようだが。

ヒントぐらいを与えるのはいいのだろうか。

「どんなに疲れていたとしても、大切な方の笑顔で癒されるということではないでしょうか。ラヴィ様のお兄様がたはラヴィ様をとても大切にされていらっしゃるようですから」

「少し、過保護だとは思いますが」

「確かにそうですね……」

最初に伺ったときの対応から過保護なことは分かっていた。

しかし最終的にはラヴィ様に甘いらしく、ラヴィ様の意思に任せていた。

「ですから、」

陛下も同じなのだよと言おうとしたら向こうからの声に遮られた。

「そういえばクロエはどこに行ったんだ」

「クロエ様でしたら先程からお姿が見えませんが……」

本人がチャンスを遮ってどうする!!

沈黙が流れていき、遠慮がちにラヴィ様がこちらを見た。

「え、えつとあたしは大丈夫ですからクロエ様は戻られても……」

「……そうですね、すみません」

窓から出てわざわざ遠回りしてから陛下の執務室へと足を踏み入れた。

「すみません。少し私用で出ておりました」

まさか隣にラヴィ様がいらっしやるなんて思ってもいないだろう。ある程度時間が経ったらこっそり窓から出て部屋に戻ると言っていたので大丈夫だと思う。

少ししてからちらりと視線をやると僅かに開いていたはずの扉は閉まっていた。

帰られたのだろうと思ったが最後まで陛下には伝えなかった。

執務室へ見学？（後書き）

自分でせっかくのフォローチャンスを遮ったので些細な意地悪で教えなかった、っていう感じですかね。

ラヴィは陛下の違う一面を見ることは出来ましたが、書いている本人も不思議なくらい恋に変わるのかな、これ！

いや、うん、ちゃんと変わります！ 変わりますから！

華やかな場所（前書き）

すみません、一人称の件ですがやはりプロット通りのもの少し後に
なりそうです・・・！！

華やかな場所

お城でささやかな夜会が開かれるそうです。なんとあたしにも参加して欲しいとのこと。

帝都はノリツよりも住んでいる貴族が多いし、階級とか凄く気にされると思うんです。

現状、陛下のお客様としてここにいらっしゃるあたしが出席なんて滅相もない。

それに衣装も持ってきていないと言えば陛下からのプレゼントだと渡されてしまった。

「出ないわけには行かないよね・・・」

「やはり乗り気ではありませんか？」

「夜会が開かれるのは明後日ですから、もし無理そうでしたら体調不良という感じで辞退の申し出が出来るとは思いますが・・・」

でもそんなことをしたらきつと陛下に失礼に当たるから。

ノリツのように昔から交流のある人はこちらにはほとんどいないから、あたしだけ。

いつも兄たちが一緒にいてくれたから怖くなかったのに。

「もう少ししっかりしないと」

いつまでも兄たちが傍にいてくれるわけじゃない。

「クロエ様やアイリス様もご出席されるはずですからおふたりのお傍にいらればよろしいのではないでしょうか」

「きつと陛下もクロエ様もお考えになられていると思いますわ」

励ましてくれるふたりに心配をかけないようにと頷くと微笑んだ。

「ささやかになって言うけれどきつと、ノリツで開かれるものとは全然規模も違うよね」

「人が多いですから」

とりあえず失礼がないように礼儀作法とかアイリスさんに見てもらった方がいいかも。

一応お伺いをして時間があるようなら会ってもらおう。

「というわけなんです」

時間があるとのことなのでさっそくアイリスさんと会って事情を説明した。

「あの人は・・・」

またなにやらぼそりと呟かっていたけれど聞き取れなくて首を傾げる。

「なんでもありませんわ」

あたし耳悪くなったわけではないよね？

えっと、きつと風が浚っていったのかも！

「礼儀作法の確認でしたわね」

「はい。一応礼儀作法に関しては幼い頃から厳しくしつけられてはきたんですけど、こちらでも同じで良いのかと思ひまして・・・」

「そうですね。今のままでも十分通用するとは思ひますが、時と場合によつて使い分けることを覚えた方がいかもしれませんわ」

ふむふむと頷きながら話を聞いていく。

もし自分に姉がいたとしたらこんな感じなのかな。

夕方までじっくり話して当日にどうするかなどを決めた。

アイリスさんとクロ工様の傍に居るということで話はまとまつた。

「ドレスは持つてきてはけませんわよね？　どうなされるのですか？」

「それは、あの・・・陛下からプレゼントだと・・・」

あたしに似合うのかどうかは分からないけれどきつと高そうなものではないかと思う。なんだか申し訳ないというか。

それをアイリスさんに話したら呆れ顔で言われてしまった。

「貴方が気になさらなくてもよろしいですわ。あの方が贈りたくて送つただけですもの。それを着て笑つて差し上げればいいんですよ」

「はあ・・・」

あいまいに頷いて濁したけれど出なきゃいけないので着ます、よ？ はい。

ただ似合うかどうかは別問題だと思うんですよ。着られていることにならなきゃいいんですけど。

「でもお客というかお試しでここにいさせていただいているのに、贈っていただくなんて・・・そういうことってよくあることなんですか？」

「いいえ。それだけ貴方が大事なお客さまだということではなくて？」

大事なお客さま、大事な・・・なにが？

あたしのなにがあの方の目に止まったのでしょうか。

「そつえばラヴィ様にお聞きしたいことがあったんですわ」

「え、はい。なんででしょうか？」

首を傾げると真剣な表情を向けられてぐくりと息をのむ。

「ラヴィ様は陛下のことをどう思っているのでしょうか？」

「え・・・っと、優しくて良い方だと思いますけど・・・あと、とても真面目で表情豊かな方だと」

執務室をこっそり見学させていただいた時に見たいいつも見る陛下の違う一面。

あんな風に忙しいながらもわざわざあたしとの時間を設けていただいたり。

言葉に出すことはなかったけれど、カッコいいと思った。

「では皇帝陛下としてではなく、ひとりの男性としては？」

思考がぴたりと止まった。あたしはそれに対して答えることが出来なかった。

だって考えたことがなかったというか、そんな風に見たことがなかった。

皇帝陛下という自分よりも上の立場にいる方で、隣にいらしていただくのも恐れ多いのに。

「ごめんなさい。どうやら困惑させてしまったみたいですね」

「あ、え、いえ……」

心臓の鼓動がやけに早く感じる。

よく分からないけど頭がぐるぐるとこんがらがっているみたいな感じ。

なんだか陛下と顔を会わせづらくなったような気がする。

そんな感じで夜会が開かれる日まで悩み続けることになったのだった。

華やかな場所（後書き）

またしてもアイリスが核心に迫ることを言いました。ぶっちゃけ最初に考えていたのよりもアイリスがキーパーソンになっている気がします。

ここから一気にラヴィの心情が変化していくのを書いていけたらなあと思つてます。

ちよつとした補足をば。

陛下に近い人間や上層部の人間は（お試し）皇妃候補であることを知っています。

それ以外のお城で働いている人々は大事なお客様であるということしか知りません。

クロエが言っていた、いずれはの部分は皇妃候補のことを指していました。

華やかな場所？

とうとう夜会の日がやってきてしまいました。

あたしはクロエ様と共に会場に向かうことになっています。

「うふふっ」

「うふふふっ」

えっとマーガレットさんとシルビアさんが少し怖いのですが、先程からずーっと笑っている。

「あ、あのふたりとも？」

「ラヴィ様を着飾る絶好のチャンスですもの！」

「他の令嬢たちなど霞むほど愛らしくして見せます！！」

気合十分と言った感じなんだけど、ちょっと熱くなり過ぎというか。

陛下は忙しいらしくあのアイリスさんとの会話の日から会っていない。

正直、少しだけほっとしている自分がいた。普通に接することができる自信もなかった。

「ほどほどにお願いします」

「そういうわけにはいきません！」

「ラヴィ様はとても素材がいいのですからきつと仕上がりもばっちりです。どのような感じにするのか考えて眠れなかったほどですもの」

は、ははつと乾いた笑いを浮かべるしかなかった。

マーガレットさんとシルビアさんにより施されたお化粧から髪型まで。

鏡に映っている自分を思わず何度も見返してしまった。これが本当に自分なのだろうか。

「このドレスもラヴィ様にぴったりですわ」

「ええ。淡いクリーム色の生地に部分的に施されたレースは甘過ぎず、その中に大人っぽさも垣間見える一品です」

お姫さまのようなドレスだと最初に見て思った。自分に本当に似合うのかと。

他の参加者の目にはどう映るのだろう。

一番気になるのは陛下の目にどう映るのか、だけれど。

こんこんとノックの音が聞こえて返事をするクロエ様が入ってこられた。

「失礼します。ラヴィ様、そろそろ……」

ぴたりと止まってしまわれた。

「あ、あの……？」

「私が先に拝見しても良かったんでしょうか」

苦笑しながら言うクロエ様に首を傾げる。

「すみません、今のは聞かなかったことにしてください。それではそろそろ参りましょうか」

「は、はい」

どきどきしながら待機室へとやってくればアイリスさんもすでに来ていた。

「とてもお似合いですわ、ラヴィ様」

「ありがとうございます。アイリスさんもとても綺麗です」

ワインレッドのロングドレスがとてもよく似合っている。

あたしとは本当に正反対な人だなと改めて思う。それほどアイリスさんは綺麗だった。

「陛下の御着きです」

廊下から聞こえてきた声に心臓がひときわ大きく脈打った。

扉が開いて陛下が入ってこられた。誰かにとんとんと肩を軽く押されて一歩前へと出る。

「ラヴィ………？」

と、とても驚いたような雰囲気なんですけど。やっぱり似合わない、かな。

俯こうとしたら陛下がふっと微笑んでとても優しげな眼差しを向けられる。

「ありきたりな言葉かもしれないが、とてもよく、似合っている」

「あ、あり、が、とう、ございます」

別の意味で俯いてしまう結果になった。赤くなってしまった顔を隠すように。

「アイリス、貴方一体なにを言ったんですか？」

「責められるようなことではありませんわ。少し、背中を押しただけです」

そうなんです。アイリスさんがあんなこと聞かれるから！

「どうした？」

「な、なんでもないです！」

勢いよく顔をあげるとぐっと手を握り締めて笑った。

「あまり無理はするな。クロエに言えば退席しても構わない」
「はい」

とうとう開演の時間がやってきて心を決めた。

先にアイリスさんとクロエ様と共に会場へと入ればやはり物珍しいのか視線を集めてしまう。

「はうつっ……」

「大丈夫ですわ、ラヴィ様。私たちも傍におりますし、陛下もいらつしゃいますから」
「が、頑張ります」

ときどきと逸る鼓動を落ち着けるように一度目を閉じる。

大丈夫、あたしは陛下のお客様としてこの場に立っているのだからあたしがしっかりしなければ。

心を落ち着けると目をゆっくりと開けて前を見据えた。

「（これはこれは……この方には本当に驚かされますね……）」

「（雰囲気が一変ですわね。今まさに孵化された蝶のよう。これからもっともお綺麗になられるでしょうね）」

やはりノリツとは違いとても華やかだ。

目がちかちかしてしまいそうなほど。

「大丈夫ですか？ ラヴィ様」

「はい。クロエ様はここにいらしても大丈夫なんですか？」

「ええ。こういう場では特に仕事はありませんからね」

アイリスさんは次々とダンスに誘われて中央で貴族の子息さんたちと踊られている。

陛下はたまにこちらを見てはふわりと微笑まれる。

直線上にいる方々や偶然見てしまわれた方は顔を僅かに赤く染められて陛下に見惚れていた。

「……本当だったんですね」

実際に見てみると本当だったんだなあと。

「仮面があつてこれですからね。仮面がなければ今頃地獄絵図でしたよ。（ラヴィ様がいらっしゃるから余計にと言った感じですかね。向けられているご本人はけろっとされてますが）」

雰囲気でも駄目っていう方がいらっしゃるといふのはこういうことでしたか。

耐性があるというクロエ様やアイリスさん以外に顔を赤らめない人ってこの中にいるんでしょうかね。

そう思っていたら陛下がこられて手を差し伸べられる。

「踊ってもらえるか？」

「！ は、はい」

周りからの視線が物凄いです。好奇から疑念に嫉妬まで。そんなに見られてると恥ずかしいんですけれど。

踊っている間、常に陛下に見られていて顔が赤く染まる。

触れ合っている手から伝わる体温も心臓の鼓動を早くさせる。

夢のような時間も終わりは来る。

「陛下」

クロエ様に声をかけられてハツとする。

踊り終わったのにしばらくそのままだったようです。

ぺこりと一礼して壁の方へと下がる。

「あの、クロエ様」

「どうされましたか？」

「少し外に出てもいいですか？」

「構いません。おひとりでも大丈夫ですか？」

「はい」

許可を貰ってバルコニーへと出た。
まだ心臓がドキドキいていた。

華やかな場所？（後書き）

徐々に、徐々に進んでいます。
書いてる自分までも痒いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9745t/>

月光陛下と太陽妃

2011年10月8日23時57分発行